

2

参画と協働のための
地域福祉ガイドブック

わかもの × 地 域

10～20代が地域に触れる・活動に
参画するためのコーディネート

はじめに

大阪市社会福祉協議会（以下、市社協とする。）では、地域福祉活動の推進と発信を目的として、大阪市地域福祉活動推進委員会（以下、委員会とする。）を設置しています。

委員会では、これまで「地域福祉活動を進めるための大切な視点」（平成 25 年 3 月）などの策定・発信をすすめてきましたが、実際の活動を具体的に推し進めるためには、従来の理念を中心とした発信に留まらず、テーマを絞り込み、より踏み込んだ媒体が必要であるとの話し合いを経て、「参画と協働のための地域福祉ガイドブック」が考案され、このたび第 1 弾となる 3 テーマのガイドブックが完成を迎えました。

- ① 身近な地域で気づく・つなぐ・話しあう
- ② わかもの × 地域 - 10 ～ 20 代が地域に^{かける}触れる・活動に参画するためのコーディネーター
- ③ 社会福祉法人の地域における公益的な活動 - 参画と協働の方策 -

本ガイドブックのテーマは「わかもの × 地域 - 10 ～ 20 代が地域に触れる・活動に参画するためのコーディネーター」。学生をはじめとする若い世代が、地域のつながりや、ボランティア活動などに一歩踏み出すことを受け止め、応援するためのコーディネーター（調整）のポイントと具体的な事例を紹介するものとなっています。

なお、3 テーマのガイドブックと同時期に策定された「大阪市地域福祉活動推進計画」は、地域住民をはじめとする民間の活動主体の取組みの方向性や目標を提案するものとなっています。本ガイドブックとあわせてご覧いただき、つながり・支えあうことができる福祉コミュニティをつくるための一助としていただけますと幸いです。

大阪市地域福祉活動推進委員会
(社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会)

目次

1. 「10 ～ 20 代」に焦点を当てて	3
2. それぞれの特色	5
1 学生・若者の特性／活動の入口	6
2 学校・企業・中間支援組織の特性	8
3 活動先の思い	12
3. 活動の入口 事例集	13
学生事例 1 夏のボランティア体験（浪速区）	14
学生事例 2 留学生が浴衣姿で盆踊りを盛りあげる（浪速区）	15
学生事例 3 高校がすすめる“地域・社会とつながる”実践（北区）	16
学生事例 4 看護学生が地域をフィールドに実習・活動（住之江区）	17
学生事例 5 中学生の学びを支える大学生サポーターの活動（住吉区）	18
社会人事例 1 小笠原一磨さんの場合（東淀川区）	19
社会人事例 2 竹田有希さんの場合（阿倍野区）	20
4. 「わかもの×地域」そのコーディネートのコツ	21
5. 資料集	26

1

「10～20代」に焦点を当てて

地域活動を担う団体やグループからは、担い手の固定化・減少が代表的な課題として聞かれ、活動参加への呼びかけや情報発信など、さまざまな試行錯誤がなされています。

そうした現状から、委員会では「新しい担い手の参画」をガイドブックの一つのテーマとして取りあげることとなりました。本来、幅広い世代の参画を促していくことが必要ですが、今回はあえて「学生をはじめとする10～20代」(※)に焦点を当てることとしました。

10～20代という時期は、義務教育から進学、そして社会人へ…と、生活スタイルや居住する地域が流動的で、縁あって地域活動やボランティア活動に関わっても、期間限定や単発になりやすいことが想定されます。

新たな担い手づくりという面では、決してすぐに芽が出るものばかりではありませんが、学校や仕事の枠を超えて社会的活動に触れる経験をすることは、その人のかけがえない財産となり、キャリアデザイン、ライフデザインの観点からも将来につながることを期待されます。その中で、人とのつながりや地域への愛着、自己実現・やりがいを得たり、活動先にとっては、新しい風や活気をもたらす存在になる可能性もあります。

「若い感性を地域に吹かせることができれば」「もしかしたらこの地域にずっといないかもしれないけど、何かを感じ取って、さまざまな領域、他の地域での活躍へとつながれば」——そんな思いをもって、未来に向かっての先行投資として、「10～20代」の学生・若者に焦点を当てて、ガイドブックとしてまとめました。

※本ガイドブックでは「学生をはじめとする10～20代」(社会人を含む)について、以降、「学生・若者」と表記します。



▲平野区社会福祉協議会が3回シリーズで企画・開催した学生ボランティア講座。最終回では、大学生らがボランティア体験した様子をスライドショーで共有した後、区内で活躍するボランティアと交流しました。

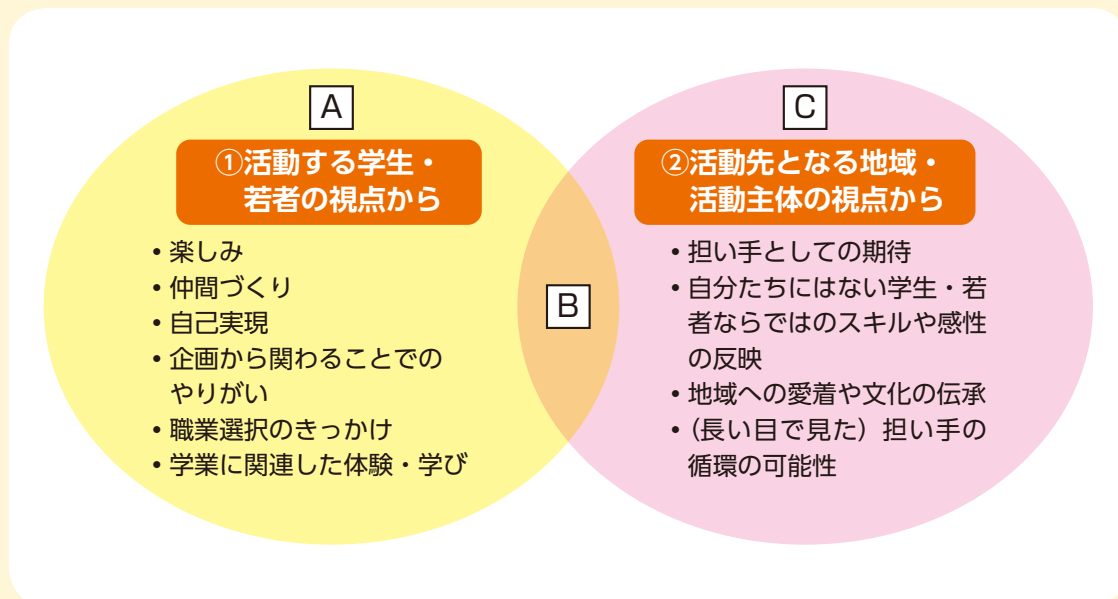
学生・若者が地域活動等に関わる意義

①活動する学生・若者の視点から

「楽しみ」「仲間づくり」「自己実現」「企画から関わることでのやりがい」「職業選択のきっかけ」「学業に関連した体験・学び」など

②活動先となる地域・活動主体の視点から

「担い手としての期待」「自分たちにはない学生・若者ならではのスキルや感性の反映」「地域への愛着や文化の伝承」「(長い目で見た) 担い手の循環の可能性」など



⇒・それぞれ固有の部分（A・C）もあれば、重なる部分（B）もある。

・活動する学生・若者にとっての“学びの側面”と、助け合いの一員（担い手）として“貢献できる側面”とがある。長期的視点に立って関心や愛着を育み、担い手の育成・循環につなげる視点が大切。

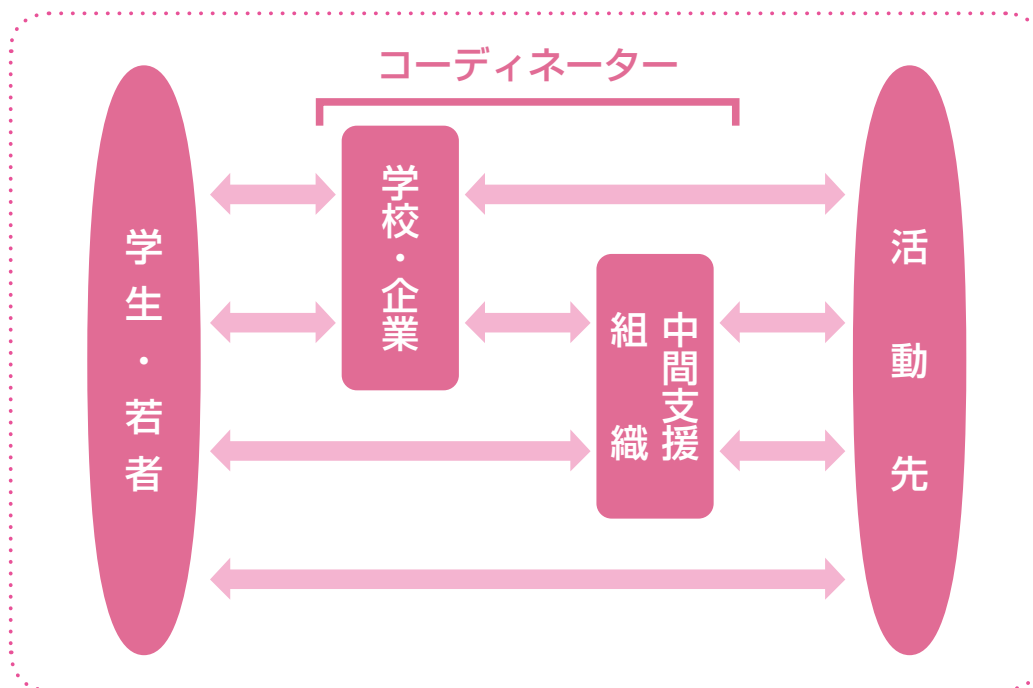
本ガイドブックの活用方法・読み手

- ・このガイドブックは、10～20代の地域活動・ボランティア活動等への参画をすすめるための調整役となる人（社会福祉協議会（以下、社協とする。）などの中間支援組織のスタッフ、学校・企業や活動先団体の調整窓口となる人など）を主な読み手としてまとめています。
- ・一方で「ちょっと関心がある」「こんなことをやってみたい」「今活動している」という10～20代のみなさんにも読んでいただける内容となっています。事例やポイントからイメージを膨らませたり、活動に向けて一歩踏み出す際には資料集の連絡先（P.26～27）もあわせてご覧ください。

2

それぞれの特色

学生・若者の地域活動等への参加には、さまざまな人・機関が登場し、いろいろな活動の入口があります。まずはその全体像についてみていきましょう。



図のように、学生・若者が、活動先（地域団体、ボランティアグループ、NPO、施設、イベント企画者など）とつながるまでの間に、学校や企業、中間支援組織（社協など）が位置しています。

学生・若者が、所属する学校・企業を介して活動先とつながる場合もあれば、中間支援組織を介する場合、さらには活動先に直接アクセスしたり、活動先の人たちからの紹介がきっかけとなる場合もあります。

①学生・若者の特性／活動の入口

- (1) 学生・若者の特性（カテゴリー別）
- (2) 活動の入口

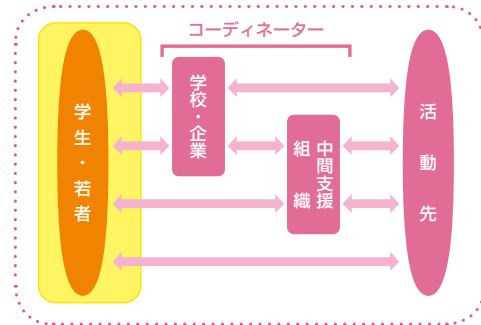
②学校・企業・中間支援組織の特性

- (1) 学校としての視点
- (2) 企業の社会貢献活動として
- (3) 社協をはじめとする中間支援組織の特性

③活動先の思い

1 学生・若者の特性／活動の入口

まずは、学生・若者がどのような状況にあるのか、学校種別／社会人の分類と、活動の形について、その特性を見ていきたいと思います。（本ガイドブックでは、自発的・主体的な活動を始めやすい年齢層として、おおよそ「高校生以上」を中心に解説しています）



（1）学生・若者の特性（カテゴリー別）

カテゴリー	テーマに関連した特性
小学生・中学生	- 一人での行動は限られ、活動にあたって親の同意が必要。 - 校区内での行動が基本となる。 - 学校を通じた影響力が大きい。 ➡ 学校や親に信頼ある情報を届けることが重要となる。
高校生	- 小中学生よりも自らの意思で行動できる幅が広がる。 - 授業を通しての接点のほか、生徒会活動、クラブ活動、手あげによりボランティア活動に触れる機会がある。 ➡ 高校生までは、教育・指導の色合いが強くなることが多い。
大学生・専門学校生等	- ボランティアサークル等による活動（定期的な活動であれば、担い手としての役割も期待される）、学内のボランティアセンターや社会貢献室が行うボランティア活動の紹介（中には単位化できる活動もある）など、活動の幅が広がる。 - 進路や専攻が活動の動機となることがある。（例：教育分野志望の学生が、子ども食堂を通して親世代と関わることで、親の思い・考えを知りたいという思いで活動） ➡ 主体性・自発性による活動が中心となる。
社会人	- ライフスタイルが変化しやすい時期。 - 仕事や子育てを通して、地域（居住地／勤務地）や活動グループと接するチャンネルが新たに生まれることもある。 - 学生時代の活動を継続する人もいる。 - 地域活動・ボランティア活動等で活かせるスキルをもっている若者もいる。（バルーンアート、パフォーマンス等） ➡ 無理のない形でライフワークとして地域活動・ボランティア活動等を継続していく視点が大切。

小・中学生の親も含めて、表に掲げるいずれの世代も「電話」「FAX」よりも「インターネット」を介したやりとりに慣れ親しんでいると考えられます。このことは、情報媒体の選択においても考慮すべきポイントです。

(2) 活動の入口

カテゴリー	例えばこんな形で・・・
学校の授業として (実習を含む)	(例) NPOが実施する子育て中の親や子どもが集まる場に、高校生が授業の一環で参加。大学生はボランティア実習で参加。
学校等からの紹介	(例) 大学のボランティアセンターや教員から紹介を受けて、子どもの学習支援の活動に関わる。
自主的な活動	(例) 大学のボランティアサークルが、地域の運動会で活発に活動している。毎年リーダーの引継ぎを行いながら、地域との関係を継続している。 (例) 20代の人が情報誌に掲載されたボランティア募集記事を見て、イベント運営のボランティア活動に参加。
地域団体等が 呼びかける活動	(例) 地域のイベント等で、小学生・中学生・高校生が地域と関わる機会をつくっている。(小学生は地域の運動会でバルーンアートをする。中学生はイベントの休憩時間に小さい子どもの遊び相手をする。高校生は七夕会、クリスマス会にて演奏の披露や子どもたちの遊び相手をするなど)

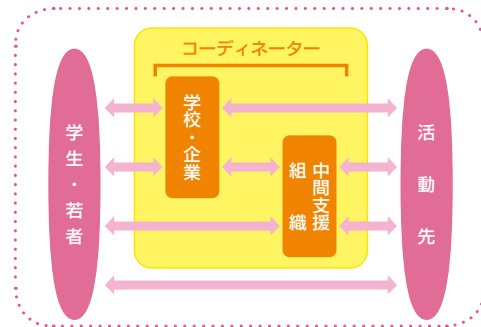
学校の授業であれば、多くの学生と接点をもつことができ、影響度が大きくなります。その一方で、授業に位置づけることで自発性・積極性が弱まるとの意見もあります。

学校によっては、授業で多くの学生に触れる機会をつくり、その後「続けて関わりたい」「他にも何かしてみたい」と感じた学生への自主的な活動の入口を案内する、という工夫もみられます。

2 学校・企業・中間支援組織の特性

(1) 学校としての視点

学生が地域活動・ボランティア活動等と関わりを持つとき、学校は送り出し機関として、またはコーディネーター（調整役）として、大きな役割を果たしています。その機能は大きく分けると次のように整理することができます。



学生の地域活動・ボランティア活動等について学校が果たしている機能

①学生への活動先の紹介

- A. 授業（実習含む）として
（例）実習として地域活動に参加
- B. 授業ではないが教育の一環として
（例）教育方針に沿って、自主参加の活動としてボランティア活動を調整・紹介
- C. 情報提供として
（例）教育面での目的を位置づけず、ボランティア活動について情報提供

②活動先との関係づくり（受入・相談）

学生の活動先を探す（直接もしくは中間支援組織などを介して）

※学校として活動先を紹介するにあたって一定の基準を設けていることが多い

（例）大学のボランティアセンターで、ボランティア募集前に担当者と面談している

➡ こうしたプロセスを経ることで、情報の安心感がある

③学生に対する事前・事後教育や指導的関わり

・ 学生と教員との日常的な信頼関係があることは学校ならではの関係性により、学生は安心して活動先に行くことができ（＝上記①）、学校は事前・事後も含めて学生に対するバックアップをすることができます（＝上記③）。

・ 学校では年度当初に一年間のスケジュールを組まれることが多くなっています。中間支援組織、活動先から連絡・提案する場合は、時期に余裕をもって調整することが大切です。

・一方で、学校からの依頼の場合、スケジュール上の制約により、あらかじめ日時の指定がある場合も少なくありません。中間支援組織や活動先としては、その事情を汲んで、可能な範囲で調整することで、学生が地域に触れる・活動に参画する機会が生まれる可能性も広がります。

・学校の主たる目的は、学生への「教育」です。

➡ 地域活動・ボランティア活動を“教育”と結びつけ、学生たちに今求められている資質（例えば主体性、多様性など）と関連づけることで、学校として取り組む意義（＝活動先・中間支援組織から学校への訴求力）が高まります。

・学校としては、地域団体・ボランティア団体・NPOなどの活動先と縁あって直接つながることもありますが、新たに開拓するには限界があります。

➡ 学校と活動先との間に、社協などの中間支援組織が入り、双方の思いを橋渡しすることで、接点が広がることが期待されます。

班会議での声

「高校の教員としては、いつ・どんなボランティア活動があるのかの情報を求めている、それを提供してもらえるとありがたいです。地域の課題についても“今このような課題がある”というリアルな声を学校に伝えてもらえると、学校側からもプログラムを提案ができる可能性があります」

（クランク記念国際高等学校 副キャンパス長 阿部賢太委員）



▲大阪市地域福祉活動推進委員会「新しい担い手の参画」班会議の様子

(2) 企業の社会貢献活動として

企業においても「社会貢献活動」として、地域活動・ボランティア活動等に関心・理解を示すところがあります。

活動例

- 企業の創業記念日に、河川の清掃活動など、全社をあげてボランティア活動を実施。
- 金融機関の職員が地域の会合に出向いて、金融犯罪や金融商品などに関する講座を実施。
- ボランティア休暇制度を導入して、社員が福祉施設などでボランティアとして活動。
- 店舗付近でこどもの登下校時の見守り活動や、清掃活動を実施。

活動を通して「小学生の時以来のボランティア活動だった」（新入社員）といった声もあり、社会人として働く人たちが、新たに地域に触れる・活動に参画する機会となっています。

こうした活動には、企業の特性・強みを活かした取組みもあれば、本業に直接関わらない領域の活動もあります。また、活動に至るまでには、企業から社協などの中間支援組織に相談する場合や、企業・NPO交流会（※）などでの出会いから活動先と結びつくこともあります。

※大阪市ボランティア・市民活動センターでは、平成30年3月に「企業等ネットワーク構築ハンドブック」を発行して、各区での展開を推進しています。

(3) 社協をはじめとする中間支援組織の特性

- ・各区社協では「ボランティア・市民活動センター」を設置し、年代を問わずボランティアのコーディネートをしています。また、大阪市ボランティア・市民活動センターは、市域での（1区にとどまらない）取組みの推進や、各区での取組みの支援を行っています。
- ・各区ボランティア・市民活動センター（ビューロー）では、具体的には「ボランティアをしたい」「関心がある」「地域で何かしたい」といった活動を希望する相談と、「ボランティアをお願いしたい」とった活動を求める相談の両方を受け付けて、それらに対する個別のコーディネートを行います。そのほか、ボランティア・市民活動センター運営委員会への学生・若者の委員としての参画や、学生・若者に焦点をあてた企画を試みているところもあります。
- ・また、各区の「まちづくりセンター」（区によって運営主体が異なる。一部区社協が受託）では、多様な人・団体が地域活動に関わることをめざして、地域団体と企業・NPO・学校等が協働する機会を積極的につくっているところもあります。



ボランティアの相談窓口（大阪市ボランティア・市民活動センター）

各区社協へのテーマに関する照会結果から

区社協が関わる学生・若者の活動事例

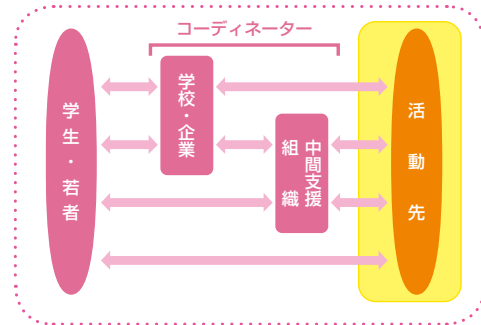
- ・区内高校の生徒がさまざまなイベントで運営ボランティアとして参加
- ・区内高校（デザイン系学科）の生徒がイベントポスターのデザインを作成
- ・高校生ユニットが商店街のイベントでバンド演奏を披露
- ・区内専門学校の学生が、地域単位で実施される子ども食堂の設営・調理・配膳や、食後の学習支援などで活動
- ・区内大学の学生（ボランティアサークルのメンバー）が区ボランティア・市民活動センター運営委員会に参画
- ・中学生・高校生・大学生が東日本大震災の被災地へのボランティア（事前学習、ふりかえり会など含む）に参加
- ・区社協に相談があったボランティア希望者（20代）が区内のサロンで継続的に活動
- ・海外からの留学生（20代）が障がい者の交流の場でボランティアとして活動
- ・20代の区民が区独自の有償による助け合い活動に会員登録して活動

区社協としての学生・若者の地域活動・ボランティア活動等のコーディネートについて

工夫・心がけている点	課題・困難を感じる点
・無理なくできる活動として、負担にならないように、曜日・時間等に配慮している。 ・継続性を重視しすぎない。 ・学生・若者が手応えを感じられる主体的な活動になるようにしている。 ・学生・若者が参加しやすく、関心を持たせる企画にするようにしている。 ・単位や授業がきっかけであってもボランティアへの理解が深まるようにしている。 ・情報発信・申込・共有のツールを工夫している。 ・学校と連携を重要視している。 ・福祉教育でボランティア活動の入口をつくるよう心がけている。	・活動の曜日・時間・時期の調整が難しい。就職活動や授業の関係で事前説明をしても急な欠席になることがある。 ・一時的な参加はあるが、継続的な活動につながりづらい。 ・進級・進学によって環境が変わるので活動が続きにくい。 ・お客様になりがち。おもてなししすぎではないかと感じることもある。 ・学生・若者が参加しやすい活動先が少ない。 ・ボランティアや地域活動と聞くとハードルが高そうに思われる。 ・自発的な活動よりも、学業がきっかけの活動が多い。 ・若い世代に向けた情報発信が不足している。 ・区内に高校・専門学校・大学がなく接点がつくれない。 ・中学生へのアプローチが難しい。 ・テーマ型の活動への参加はあるが、エリア型の「地域福祉活動」につながりづらい。

3 活動先の思い

学生・若者の活動を受け入れる、もしくは積極的に求める活動先（地域団体、ボランティアグループ、NPO、施設、イベント企画者など）の思いにはどのようなものがあるでしょうか。10～20代という年齢層に特に期待すること、一緒に活動していくことのねらいについて見てみます。



学生・若者の活動を受け入れる活動先の思い ※検討班の話し合い、ヒアリングに基づき作成

● 学生・若者のこんなところに期待

- ・元気さ・明るさ・華やかさ。
- ・にぎやかさがあって場が楽しくなる。
- ・運営している側もパワーがもらえる。
- ・フットワークが軽い。些細なことに気付き、すぐに動いてくれる。
- ・人数がいてこそできることが頼める。（イベント運営、世代間のふれあいなど）
- ・施設では、子どもたちが来ると利用者の目が輝く。
- ・地域のサロンに学生が来ると、年配の方はまるで孫と接するようにふれあいを楽しむ。
- ・若者ならではの発想力がある。今までの活動者が思いつかない工夫を提案してくれる。

● 一緒に活動する学生・若者に向けた思い

- ・小さい頃にサロンやイベントで面倒を見ていた子が、大きくなってボランティアとして帰ってきてくれると嬉しい。（そうなるように声をかけてお誘いをしている）
- ・活動を通じて、文化（おまつり、餅つきなど）を共有・伝承したい。
- ・学生時代に活動していた子には、働いてからもたまには足を運んでくれればと思う。
- ・ここでの活動が職業選択のヒントになっていけば。
- ・これをきっかけに地域内での“顔の見える関係”ができれば。

以上のように、学生・若者を受け入れることは“自分たち（活動先）の活動にプラスになる”側面と、活動の場を提供することで“学生・若者にとってプラスになる”側面の二つがあります。

活動先の動きとしては、中間支援組織などを介して、活動する学生・若者を受け入れたり、調整する場合のほか、活動先が直接調整や受入れを行う場合もあります。その際には、活動先が自らコーディネート機能を発揮する部分が大きくなります。

NPOなどの団体では、ボランティアとして活動していた学生が、卒業後に就職してからも、仕事の合間を縫って継続的に活動する姿も見られます。そこでは、活動者同士のコミュニティが生まれ、その人たちの“居場所”になっている場合も見受けられます。

3

活動の入口 事例集

10～20代の活動の入口については「学校がきっかけとなる」「学校を経由せずに活動先とつながる」「学校卒業後の社会人層が取り組む」といった場合が考えられます。

また、すでにある活動に加わるだけでなく、自分たちで新たに活動を創りあげていくこともできます。

ここでは、10～20代の活動の入口を「学生事例」「社会人事例」に分けて紹介します。

学生事例

各区社協や検討メンバーから集約した情報をもとに、活動事例を5つ紹介します。学校の関わりが大きく、教育的な側面も含まれるものとなります。

- 1 夏のボランティア体験（浪速区）
- 2 留学生が浴衣姿で盆踊りを盛りあげる（浪速区）
- 3 高校がすすめる“地域・社会とつながる”実践（北区）
- 4 看護学生が地域をフィールドに実習・活動（住之江区）
- 5 中学生の学びを支える大学生サポーターの活動（住吉区）

社会人事例

市社協が発行する広報誌「大阪の社会福祉」のコーナー「世代をつなぐ地域活動者に聞く」に過去に掲載した方のうち、20代から活動に参画していた方を「社会人事例」として取りあげて、当時お聞きした活動の入口・思いとともに、現在の活動を紹介します。

- 1 小笠原一磨さんの場合（東淀川区）
- 2 竹田有希さんの場合（阿倍野区）

「世代をつなぐ地域活動者に聞く」とは

- ・ 広報誌「大阪の社会福祉」の若手の地域活動者を紹介するコーナー。平成26年5月号から平成29年6月号まで、約3年間をかけて、市内全24区24組のインタビュー記事を掲載しました。
- ・ 関連して、インタビュー内容をまとめた冊子の発行、公開座談会、分析結果の学会発表（市社協と甲南女子大学鈴木大介准教授との共同研究）にも取り組んできました。



世代をつなぐ地域活動者に聞く vol.2

学生事例 1

夏のボランティア体験（浪速区）

■ 学校・ボランティアグループ・施設とともに

浪速区社協では、小学3年生以上～大人を対象に、7～9月にボランティア体験を実施しています。内容は、施設でのふれあい体験やイベントの着ぐるみボランティア、講座受講など全16メニュー（平成29年度分）。浪速区社協の日野恵子さんは「待っているだけでは学生からボランティアをしたいという声はあがってこない。担い手づくりというより福祉教育という思いでやっています」と話します。

準備手順は、まず年度当初に小学校・中学校の校長会に出向いて協力依頼。そして、活動先となるボランティアグループや施設等に受入内容を個別に相談します。「どなたでも」と広く受け入れるものから、一時保育のボランティアであれば「高校生以上」と、安全面にも配慮して対象を設定します。

チラシは区内全小学校の3年生以上、中学校の全生徒に配布。区内高校・専門学校や区社協ホームページなどでも周知し、参加希望者は区社協に電話・FAX・ネット上の参加フォームなどで申し込む仕組みとなっています（高校生以下は保護者の同意が必要）。



参加者募集チラシ

■ 細やかなフォローで“はじめてのボランティア”を応援

活動前に別日でオリエンテーションを実施。活動の心得やボランティア保険について説明するほか、活動先の方に、内容・思いを直接話していただくことも。さらに、当日その場でちょっとしたお手伝い（区社協主催イベントの準備など）をしてもらう仕掛けを組み入れており、初対面の参加者同士でつながりができることもあるそうです。



さて、何を話しているでしょう？

参加のきっかけは「福祉に関心がある」「楽しそう」「親や先生にすすめられて」「学校の課題として」「人と接するのが苦手なので…」などさまざま。区社協職員も可能な限り同行し、参加者の状況に合わせてフォロー。中には「体験した活動を続けたい」と小学3年生の児童が高齢者施設の喫茶ボランティアとして活動を続けた例もあるそうです。

ココがポイント！

- # 周知を見越した早めの段取り
- # 安全性と広がりをもたせる対象者設定
- # ターゲットがなじみやすい申込方法

学生事例2 留学生が浴衣姿で盆踊りを盛りあげる（浪速区）

■ 学校の「地域のために」の思いを形に

浪速区にあるエール学園は、さまざまな国にルーツをもつ留学生が学ぶ専門学校です。同学園は、もともと地元の地域に対して「学生たちがここで勉強できるのは地域のおかげ」という思いがあり、地域のことを学ぶ「地域ゼミ」を設けて、地域活動や区社協のデイサービスなどで見学・交流をしていました。

浪速区ボランティア・市民活動センターの立上げに向けたセンター準備委員会には、同学園の理事、学校が所在する難波元町地域の活動者も参画。そこで議論を重ねる中で、センター化の目玉企画の一つとして、地域の縁日に参加する「なんば de ゆかた」が発案されました。（主催：学校法人エール学園、浪速区社協）



エール学園と地域との交流

■ お互いに“ありがとう”が出てくる場面をつくる

2回目の開催となった平成29年8月23日。この日のために、地元地域を中心に「着付けボランティア」を募集しており、区社協の一室で、留学生たちは次々と浴衣姿に。みんなで会場の難波中公園に繰り出し、盆踊りの輪に加わりながら、縁日の店番を担当しました。

着付けができる幅広い年代の人がボランティアとして関わることで、留学生が日本文化に触れる。留学生たちは、単に参加するだけでなく、縁日の店番という役割を担うことで地域の恒例行事を盛りあげる。関わる誰もが、誰かの役に立てるようなきっかけづくりをすることで、同じ地域で暮らす・学ぶ人たちが、お互いに「ありがとう」と言い合える一場面となっています。



留学生たちが縁日の店番を担当



着付けボランティアの協力で浴衣姿に



段々とさまになってきました

ココがポイント！

- # 学生・若者が興味を持つもの・惹かれるものと結びつける
- # ボランティア・市民活動センターの仕組みを活用
- # 参加だけでなく役割をつくる

学生事例3 高校がすすめる“地域・社会とつながる”実践（北区）

■ 地域は形式化できないリアルな教材

全国各地にキャンパスをもつクラーク記念国際高等学校。高校にはめずらしいゼミ授業などユニークな取り組みがあります。

大阪梅田キャンパスでは、ボランティア活動や地域活性化を考えるキャリア学習（大阪天満宮や天神橋筋商店街との協働）など「地域や社会とつながる」プログラムを取り入れています。

副キャンパス長の阿部賢太先生は「生徒には日頃から、6つのスキルを身につけるよう伝えています。これらは教えられるものではなく、地域や社会に触れて自ら考えるしかない。地域は“形式化できないリアルな教材”だと思っています」と語ります。6つのスキル＝①思考力②判断力③表現力④多様性⑤協働性⑥主体性は、文部科学省が示す方針をもとに、同校が独自に設定したもの。これらのスキルを養うという教育上の「目的」をぶれることなく貫き、生徒たちにはあらゆる活動と6つのスキルを関連づけて伝えていると言います。



生徒たちの力でまちをキレイに

■ 教育面での目的に沿って活動の形を提案

同校では、地元である堂島地域の餅つきや北区内のイベントなど、年数回ボランティア活動を募集・実施しています。

活動先と出会うきっかけは、北区まちづくりセンターの紹介が大きいものの、実際の活動内容は学校と活動先が直接交渉。活動先の思いを汲みつつ、学校としての目的を伝え、時に「生徒たちにこんな説明をしてほしい」「こんな役割をさせてもらえないか」と提案することもあります。

なお、ボランティア募集は、広く生徒に募るほか、「ボランティアゼミ」「生徒会」の活動と結びつけているため、毎回ある程度の活動者数を見込むことができます。これにより、自発性を前提としながらも、活動先からの依頼を安定して受けやすい仕組みとなっています。

学内でのボランティア募集・活動の流れ

- ①活動先からの依頼を受付
- ②活動先と学校間で活動内容について協議
（学校の教育目的と合うよう調整）
- ③職員朝礼にて職員間で共有
- ④ホームルーム・掲示により生徒に案内
- ⑤申込用紙に書き込み（全生徒が応募可）
- ⑥学内で事前説明会
（活動先の人に説明依頼することもある）
- ⑦活動（先生は引率・同行する）
- ⑧事後学習（活動のふりかえり）

ココがポイント！

- # 授業で学べないことを地域で学ぶ
- # 学校としての方針・目的を明確に

学生事例4 看護学生が地域をフィールドに実習・活動（住之江区）

■ 未来の看護師が地域の高齢者と出会う・ふれあう

母体となる病院を住之江区に構える南大阪看護専門学校では、地域のことを学生に知ってほしいという思いを抱いていました。

そんな中、まちづくりセンターとの出会いがあり、区内複数の地域で看護学生の高齢者ふれあい体験（実習）が実現。学生がグループに分かれてふれあい喫茶や高齢者食事サービスへ参加。学生から高齢者へ積極的に話しかけ、地域のボランティアの方は「立派な看護師さんになってや」と孫を見守るように温かく接してくれました。学生からは「高齢者は本来こんなに元気なんだ。入院中の高齢者が再び元気に地域で生活できるようにお手伝いしたい」といった感想が聞かれました。



地域での高齢者ふれあい体験（実習）



ボランティアの感想を学内に掲示

実習が続き、同校と地域の交流が進み、地域の運動会や盆踊りなど、実習以外のボランティア活動にも広がっています。実際にボランティアとして活動した学生は「自分が住む地域にもこんな活動があるのかな」と興味を持つようになった、という変化が見られました。活動後に学生たちが感想を書き、当日の写真を盛り込んで模造紙にまとめたものを学内に掲示することで「楽しい活動を無理なく広げたい」と教務主任の高岡操先生は話します。

■ 緩衝剤としてのまちづくりセンターの役割

まちづくりセンターでは「地域活動やボランティアに一度嫌な印象を持ってしまうと学生側、地域側ともに続かなくなってしまう。せっかくの勇気を無駄にしたくない」という思いがあり、“不幸な出会い”にならないように緩衝剤の役割として間に入るようにしています。活動日にまちづくりセンター職員も参加している場合は、互いが思いを共有しやすいよう間に入って調整します。

また、学生向けのボランティアに限らず、ボランティアを募集するからにはやりがい、役割をつくってもらうことを大切にしています。

ココがポイント！

- # 看護師として異なる世代の人たちと出会う・つながる
- # 不幸な出会いにならないように緩衝剤の役割として間に入る

学生事例5

中学生の学びを支える大学生サポーターの活動（住吉区）

■ 高校進学を意識した“学びあい”を区独自事業で推進

住吉区では、生活保護受給世帯を含む生活困窮世帯の中学生を対象に、大学生・社会人を中心としたサポーターが学習を支援する「すみよし学びあいサポート事業」が実施され、平成25年度から29年度まで住吉区社協が受託・運営してきました。（※）

サポーターとして活動する学生は、大阪市立大学、大阪大谷大学、関西大学、神戸大学、和歌山大学などで福祉や教育を専攻する大学生ら約50人。呼びかけは、関係大学の授業や掲示板での周知、口コミなどが中心です。

活動希望者は、区社協あてに申し込み、活動前にオリエンテーションを実施。活動上知り得た情報の守秘義務や、悩みを抱え込まずスタッフと共有することを確認して活動をスタートします。

活動日の調整には、1か月先の予定表を用意し、各自活動可能な日を記入。活動ペースはさまざまで、無理なく活動できる仕組みとなっています。

● すみよし学びあいサポート事業の概要 ●

【日時】 毎週火・金 18:45～20:45

【場所】 住吉区民センター

【内容】 大学生等の学習支援サポーターが中学生1～2人を担当して主に英語・国語・数学を教える。1回あたり10～15人程度のサポーターが活動。

※一定の活動費を受け取る有償の活動

■ 子どもたちから元気をもらえるのがやりがい

サポーターは「勉強だけでなく、たわいもない雑談で子どもたちから元気をもらえるのがやりがい」「高校で子どもの貧困を学んだときから関心がありました。教えることがお互いの成長につながることを実感しています」と活動の動機やモチベーションを語ります。

中学生と年齢が近い大学生だからこそできる活動。大学生自身にとっても、未来に向かって、新たな学びや出会いが生まれる、かけがえのない時間です。

そんな“学びあい”の場を、ともに活動する社会人サポーターやコーディネーター、スーパーバイザーを担う大学教員、活動を応援する主任児童委員、区社協職員らが見守りながら支えています。



サポーター募集チラシには「大学生のみなさんが、ご自身の将来の選択に悩んだり、夢を語ったりする姿をぜひ見せてください。その姿が子どもたちのロールモデルとなります」「他大学の学生との新しいつながりができる機会にもなります」といったメッセージが込められています。

ココがポイント！

- # サポーター制度（登録制）で、できるときに・無理のない活動を
- # 活動に際して求める視点や“その年代だからこそできること”を伝える

※平成30年度は他事業者が受託・運営予定。

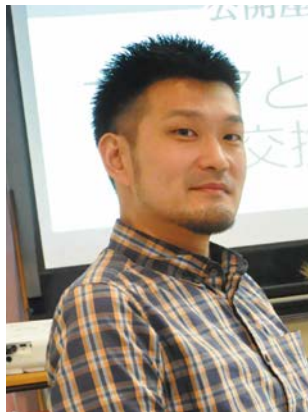
また、住吉区社協では小学生対象の学習支援活動を新たに行う予定。

社会人事例 1

小笠原一磨さんの場合（東淀川区）

広報誌「大阪の社会福祉」平成 27 年 7 月号掲載

——地域活動に関わるきっかけは？



20 代前半の頃、中学時代からの友人たちとよく遊んでいて、「何か大きなことをしたいな」「水都祭（地元の花火大会）を復活させよう」と盛り上がったんです。河川事務所などにかけ合いましたが話は進まず、僕たちには何の信用もないし、地域のことも知りませんでした。

そこでまずは「地域でボランティア活動を」と思い立ち、「東淀川区 ボランティア」とインターネットで検索して、東淀川区ボランティアビューローを発見。そこで紹介された“東淀川区ユースリーダー”に加わったのが、僕のボランティア人生の始まりです。

——その後の展開は？

2 年目にユースリーダーの代表を引き受け、若者の音楽イベントをしたいと会議で提案しました。そこでの当初の反応は厳しいものでしたが、徐々に協力もいただいて実現でき、このイベントは「東淀川区 Music Festival」として 3 度開催しました。

ほかにも、ごみ拾いや商店街との協働イベントをしたり。そして、ユースリーダーへの参加から 6 年後、東淀川区の有志で夢だった花火を遂にあげることができました。



——若い人の活動参加をもっとすすめるには？

「ボランティア大募集」というよりは「気軽にどうぞ」という感じで呼びかけて、一度参加していいなと思った人が続けてくれるといいですね。

若者のメンタルはそんなに強くないので、否定されるとへこみます（笑）。「地域でこんなことをしたい」という若者には、ぜひ一度挑戦の場を与えてほしいです。

現在の活動は？

20 代の頃とは環境が変わり、ボランティアの時間は減りました。ただ、地元に貢献したい気持ちはあるので無理のない範囲で続けています。現在は、地域の商店街にて隔月で開催されるフリマイベントのボランティアを行っています。担当は、来場者に楽しんでもらうステージの運営で、主な活動は「事前の出演者調整」と「当日のステージ進行」です。あわせて YouTube で「10000 人の笑顔大作戦」という動画も不定期で公開しています。

社会人事例 2

竹田有希さんの場合（阿倍野区）

広報誌「大阪の社会福祉」平成 27 年 5 月号掲載

——地域活動に関わるようになったきっかけは？



大学卒業後、空港の窓口で働いていましたが、以前から国際協力に関心があって、ブータンに一人旅に出かけました。現地では、経済的に貧しい中でもみんな「幸せだ」と言います。逆に「日本はどう？」と聞かれて、国内の社会問題に目を向けるきっかけになりました。そこで、どんな社会にしたいかを考える中で、一人ひとりが声を出しやすい地域コミュニティの大切さに気づき、大学院で学ぶことを決めました。

同時に、実際に自分自身も地域に関わりたいと思い、民生委員をしている母のすすめで阿倍野区社協をたずね、アクションプランの活動を紹介してもらいました。

——参加してみてどうでしたか？

アクションプランでは、愛犬家のマナーや見守り・防犯意識の向上をめざすチームに参加しました。入ってみると「来てくれてうれしい！」「次もぜひ来て！」と歓迎してもらえて、まるでわが子のように接してくれるなど、うれしい体験がありました。

しかし、活動には若い人がほとんどいない…そう感じていた時に、区役所から阿倍野区を盛りあげる若手グループの立上げの話をもらい、「絶対入ります」と即答。それが今の「あべ若」の活動につながっています。



——地域活動の魅力は？

多様な年代・価値観の人たちと出会える、それによって自分自身の幅が広がることですね。

若い人がもっと地域に関わるようになるためには、「おもしろい」「参加したい」と思えることが大事。スポット的な関わりや、在勤・在学の人参加しやすいような仕掛け・配慮も大切ではないかと考えています。

現在の活動は？

あべのを盛り上げる若者団体「あべ若」の代表をしています。現在、あべ若では、若者の活動に理解を示してくれる地域と連携して、若い人が楽しみながら地域課題解決をめざす「レンコン掘り調査選手権」や「あべのミス割烹着コンテスト」などを主催しています。



前列左：竹田さん

1

「10〜20代」に
焦点を当てて

2

それぞれの特色

3

活動の入口
事例集

4

「わかもの×地域」その
コーディネートのコツ

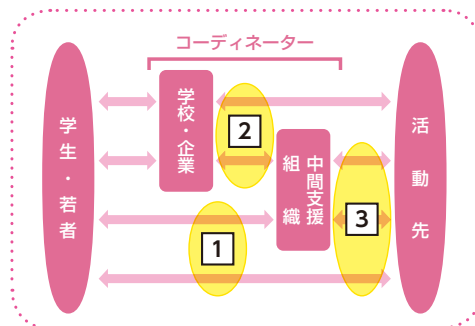
5

資料集

4 「わかもの×地域」そのコーディネートのコツ

ここでは、これまでの章を踏まえて、学生・若者の地域活動・ボランティア活動等への参画を促す際のコーディネートのポイントを紹介します。

第2章「それぞれの特性」(P.5)に掲載した図をもとに、コーディネートのコツを大きく次の3つに整理しました。



- ① 「学生・若者」の特性を踏まえ、こんなところに配慮・工夫を
- ② 「学校」とのやりとり、おさえどころはココ
- ③ 「活動先」が、学生・若者を受け入れ、応援する力を発揮するために

区社協など中間支援組織の方、学校・企業の担当の方、地域団体・NPOなど活動先の調整役の方など（総じて「コーディネーター」と表現）の参考になるようまとめました。それぞれ当てはまる部分、そうでない部分があるかと思いますが、すべてのコツは相互につながっているもの。コーディネーター同士、お互いの視点を意識して、歩み寄りのきっかけになれば幸いです。

1 「学生・若者」の特性を踏まえ、こんなところに配慮・工夫を

① 学生・若者の特性を踏まえたコーディネートの心構え

まずは当事者である学生・若者に目を向けてみます。10～20代と言えば、生活環境の変化が多い時期。学生の場合はカリキュラムや就職により、活動できる時期に制約があったり、社会人の場合は、仕事や子育てなど生活上の変化によって、一度活動に関わっても距離を置くこともあるかもしれません。また、活動の動機もさまざまで、中には「入試対策」のために活動する人に出会うこともあるかもしれません。

そのような時でも、コーディネーターとして「きっかけは何であれ、活動が参加者にとって、何かプラスになれば」「その経験が参加者にとって楽しく充実したものになれば」という視点で向き合うことが大切です。地域活動やボランティアへの理解が深まること、活動の持つ力が学生・若者の成長につながることで、それらを大切にする気持ちを持つことが、長い目でみた“循環”や“継続性”を育むことにもつながると考えるからです。

学生・若者の中には「地域で何かしてみたい」「自分に関係があることなら」「恩返しをしたい」と地域への思いを持つ人も少なくありません。そのような思いに耳を傾けてみることも大切です。

コーディネートのコツ 「長い目でみて何かのプラスになれば」と度量をもって向き合う

② 学生・若者が活動しやすい場面をつくる

学生・若者が活躍できる場面をつくったり、ボランティアを募る際、2種類の活動場面を想

定することが大切です。

一つは「学生・若者がもつ力を発揮できる活動場面」。その人の特技（例：絵を描く、パフォーマンス）や、その年代だからこそできること（例：大学生による子ども支援）を活動と結びつけるということです。こうした場面設定は、活動への入りやすさや充実感にもつながります。また、若い世代特有の発想が活きるように、企画や話し合いの場面からの関わりを取り入れるとさらにおもしろいものになるでしょう。

もう一つは「気軽に参加できる場面」。活動に慣れていない学生・若者にとっては参加のハードルが低くなります。また、活動先から中間支援組織や学校・企業などに募集をかける際、希望者が集まらなくても、当日大きく影響しないような工夫をしておけば、「万が一ボランティアが集まらなくても大丈夫」な場面にもなります（注：応募して当日キャンセルしていいという意味ではありません！）。これにより「今回は集まらなかったけど、また今度お願いします」と、その後も継続的に募集のやりとりができる関係を築くことが期待できます。

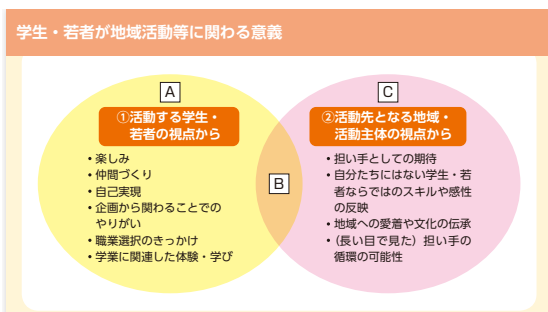
コーディネートのコツ 「力を発揮できる場面」「気軽に参加できる場面」を使い分ける

③ 学生・若者と活動先の双方に目を向ける

「こんな活動に興味がある」とコーディネーターへ相談に来た場合、活動に対して熱が高まっている状態と言えます。その熱が冷めないうちに、調整に入ることはとても大切です。そのためにも、コーディネーターは、活動情報を日頃から把握しておかなければなりません。また、区社協であれば、自組織の事業で受け入れる場面を調整することも一つの方法です。

「学生・若者」と「活動先」の思いには、重なる部分（B）もあれば、それぞれに固有の部分（A・C）があります。固有の部分には、お互いに違和感を覚えたり、ときに摩擦が生じることもあります。コーディネーターは、学生・若者に対しては活動先の思いを、活動先に対しては学生・若者の思いを代弁したり、橋渡ししたりと、相互理解を後押しすることも必要となります。

活動を経て、学生・若者が、活動先の人から「一緒にできて楽しかった」「また来てね」と声をかけられることは、自己肯定感や自信を育む、かけがえのない経験となるはずです。



第1章「10～20代に焦点を当てて」(P.4) 掲載

コーディネートのコツ 熱い気持ちが冷めないうちに手応えや自己肯定感を得られる場面へ

④ 学生・若者、活動先を含む「人間関係」に目を向ける

学生・若者が活動に関わる際には、同じ所属先の友人・先輩・後輩など「日常の人間関係」の影響は大きく、活動への入口となるほか、情報を広げる際にも力を発揮します。

一方、同じ活動で初めて出会う参加者同士や、参加者と活動先の人との関係づくりという点では、活動「前」に一工夫する方法もあります。例えば、活動前のオリエンテーションで、参加者同士の共同作業を取り入れる、活動先の人説明に来て、活動の意義やメッセージを伝える。これにより、モチベーションや安心感を高めることが期待できます。さらに、活動後の「ふりかえり」の場面で、新たな活動先と引き合わせることで、次なる活動に向けた可能性も広がります。

コーディネートのコツ 活動「前」の関係づくりでモチベーション・安心感アップ

⑤ 負担感にほどよく配慮する

参加の入口を広げるためには、学生・若者が感じる負担感に目を向け、配慮することが大切です。例えば、無理なくできるように曜日・時間・頻度等に配慮する、同年代が多く参加している活動先を提案する、友人と一緒に参加できる形をとる、といった工夫が挙げられます。

ただし、「ラクなこと」と「楽しいこと」は同じではありません。必要以上に手厚くもてなすのではなく、活動する若者・学生が、主体性や充実感を感じられる活動にすることが大切です。

コーディネートのコツ 「ラクな活動」ではなく「楽しい活動」を無理なくできる配慮を

⑥ 相手に合わせた情報発信の工夫

学生・若者に情報を届けたい！と考えるなら、本当に届けたい対象者像を明確にして、その人たちがどこに立ち寄り、どこに集まるかといった「生活動線」やWeb上のアクセス先など、情報にたどり着くルートを想定しておくことが大切です。また、誰からどんな風に伝われば、信頼感が増して行動につながりやすいか（例：先輩から、先生から、親から）という視点も大切です。

活動について情報発信する際は、活動内容・様子がより具体的にイメージできるようにしましょう。そもそもどんな課題に対する、何を目的とした活動なのか。それが伝わる事例や、興味をひくような見せ方も重要となります。

活動希望者の「申込み」にもさまざまな媒体が用いられますが、申込みに手間を感じると、せっかく興味をもっても見送られてしまうこともあります。まず、学生・若者は、電話・FAXを敬遠する傾向があります。そして、Webによる申込みであっても「申込み用紙のダウンロード→記入→送信」や、メール本文への必要事項の記載では、負担感や抵抗を感じるという人もいます。できるだけ簡易に申し込むには、例えば、QRコードを用いたリンク、申込みフォームへの直接記入などを取り入れておくことが望ましいでしょう。SNSも対象者になじんでいるものであれば、効果が期待できます。

お名前	
ふりがな	
メールアドレス	
電話番号	
年代	☐ 10代 ☐ 20代 ☐ 30代 ☐ 40代 ☐ 50代 ☐ 60代 ☐ 70代以上
参加希望日	選択してください ▼
どこでお知りになりましたか (複数選択可)	☐ ホームページ ☐ SNS ☐ 情報誌・チラシ ☐ 関係機関・窓口からの紹介 ☐ 友人・家族からの紹介 ☐ その他
備考	

入力確認

リセット

イベントや講座などの参加申込フォーム例

コーディネートのコツ 具体的な相手をイメージして、その世代に合うツールを

2 「学校」とのやりとり、おさえどころはココ

① 学校のリズムと事情を踏まえる

学校には、学校ごとの一年間のリズムがあります。授業期間、試験期間、長期休暇や日々の授業などにより、学生が活動しやすい時期と活動の制限が生じる時期があり、試験や休暇前だと「数日遅れただけで情報が伝わらなくなる」ということもあるのです。

学校と協働する際には「年間スケジュール」を意識して、確認しておくこと。特に、授業とコラボした活動を考える際は、年単位での余裕をもった調整を行い、実施のタイミングや意図をすり合わせる事が求められます。

コーディネートのコツ 学校の「一年間の流れ」と「タイミング」をインプット

② 学校が掲げる「教育」を理解する

学校がボランティアや社会貢献に関する窓口・担当教員を置いているのであれば、学校としては、それが学生への教育や自己実現に有効だと考えていると言えます。また、学生のボランティア活動を重視している学校は、その活動と教育理念・方針がリンクしているものです。中間支援組織や活動先と、学校が継続的な関係を築くためには、こうした学校の方針や担当教員の思いに関わりの中で把握していくことが大切です。

また、学校では、手探りで福祉教育を企画・実施しているところも少なくありません。中間支援組織としては、地域や社会が今抱えている課題に即したプログラムや、地域活動と結びつけたプログラムを提案できる可能性もあります。

コーディネートのコツ 学校のベースにある「教育理念・方針」を共有

③ 「組織同士」で継続的な関係をつくる

学生は一定期間で入れ替わるもの。そこで「その学校に所属する学生たち」という単位を意識した継続的な関わりをもつことで、中間支援組織、学校、活動先の間で関係性を積み重ね、継承することができます。組織やグループ単位のつながりを持つことは、ボランティアが「交替ができる」環境をつくることにもなり、学生個人の負担を和らげることにもつながります。

コーディネートのコツ 学生の入替わりを想定して、関係性を積み重ねていく

④ 学校におけるコーディネート機能の充実をめざして

すべての学校が、地域活動・ボランティア活動等について組織的に取り組む体制が整っているわけではありません。中間支援組織としては、すでに体制づくりがすすんでいる学校と協働するだけでなく、これから取り組んでいく学校にも寄り添い、提案する役割も求められるでしょう。こうしたテーマに関心を寄せる学校同士が、情報共有できるネットワークを構築することができれば、担当する教員同士の相互支援やノウハウの共有も期待できます。

コーディネートのコツ 組織的に取り組む学校のノウハウを共有

3 「活動先」が、学生・若者を受け入れ、応援する力を発揮するために

① 学生・若者や学校への関わり方の工夫を活動先において共有する

1 2 で確認した学生・若者に向けた配慮、学校との調整などは、中間支援組織のみならず、学生・若者を受け入れる「活動先」としても理解しておくことがとても重要です。中間支援組織には、活動先の状況を踏まえつつ、これらのポイントを伝えていくことが求められます。

コーディネートのコツ 中間支援組織から活動先へ、学生・若者や学校の事情を伝える

② 中間支援組織のコーディネーターとして活動場面・企画場面に入る機会をつくる

中間支援組織のコーディネーターは、時に活動先に足を運ぶことで、現場の状況を見て、活動先への理解を深めることができます。実際に学生・若者をつないだ際には、その場面に立ち会うことで、次のコーディネートにつながるヒントも得られます。

活動先としても、こうしたねらいをもって、中間支援組織のコーディネーターを時に現場に招き入れることで、よりよいコーディネートが生まれる可能性が高まることが期待できます。

コーディネートのコツ 中間支援組織と活動先で現場感・雰囲気共有

③ 継続性を強調しすぎない

「活動に長く関わってくれる人に来てほしい」——地域活動の現場からはそのような声がよく聞かれますが、最初から「継続性」を強調することで、参加の第一歩が踏み出せないことがあります。そこで「できる時に」「1回からでもOK」と「参加の気軽さ」を認めてみる。これにより、友人を活動に誘いやすくなることも期待できます。そうした入口から充実感や楽しさを味わって、その結果、本人が主体的に活動を続けることができれば理想と言えます。

そのような流れをつくっていくには、活動において自分なりの創意工夫ができること、やりがいを感じられることが重要であり、それを支える先輩方の受入れや後押し（＝地域の度量）がポイントとなるでしょう。

コーディネートのコツ 「できる時に」「1回からでもOK」など参加の間口をオープンに

④ 学生・若者の不安や思いを汲みながら活動を応援する

学生・若者が地域で活動する際、地域についての知識や当たり前とされている事柄がわからないことがよくあります。そこでの会話についていけない時に誰にも聞けなかったり、疎外感を感じるがあると、新たな活動者は遠ざかってしまうことがあります。

すべての学生・若者がエネルギーに邁進できるわけではなく、打たれ弱い人もたくさんいます。前向きな提案があった時にはそのチャレンジを後押しすることが、未来の担い手を育てることにつながるでしょう。

コーディネートのコツ 「打たれ弱さ」に配慮して、前向きな提案を後押し

以上、検討班での話し合いやヒアリングから見えてきた「コーディネートのコツ」を紹介してきました。それぞれの実践で取り入れやすい部分から参考にいただき、「わかもの×地域」の新たな出会いが一つでも多く生まれることを願います。

コーディネートのコツ（まとめ）**1 「学生・若者」の特性を踏まえ、こんなところに配慮・工夫を**

- ☐ 「長い目でみて何かのプラスになれば」と度量をもって向き合う
- ☐ 「力を発揮できる場面」「気軽に参加できる場面」を使い分ける
- ☐ 熱い気持ちが冷めないうちに手応えや自己肯定感を得られる場面へ
- ☐ 活動「前」の関係づくりでモチベーション・安心感アップ
- ☐ 「ラクな活動」ではなく「楽しい活動」を無理なくできる配慮を
- ☐ 具体的な相手をイメージして、その世代に合うツールを

2 「学校」とのやりとり、おさえどころはココ

- ☐ 学校の「一年間の流れ」と「タイミング」をインプット
- ☐ 学校のベースにある「教育理念・方針」を共有
- ☐ 学生の入替わりを想定して、関係性を積み重ねていく
- ☐ 組織的に取り組む学校のノウハウを共有

3 「活動先」が、学生・若者を受け入れ、応援する力を発揮するために

- ☐ 中間支援組織から活動先へ、学生・若者や学校の事情を伝える
- ☐ 中間支援組織と活動先で現場感・雰囲気を共有
- ☐ 「できる時に」「1回からでもOK」など参加の間口をオープンに
- ☐ 「打たれ弱さ」に配慮して、前向きな提案を後押し

（第4章原案作成：鈴木大介委員／編集：大阪市社会福祉協議会）

5

資料集

このガイドブックは、10～20代の地域活動・ボランティア活動等への参画をすすめるための「調整役となる人」を主な読み手としてまとめました。

一方で、このガイドブックに関心をもってくださった10～20代の学生・若者のみなさん、その人たちとつながりたい活動先のみなさんが、情報を得たり、新たな活動・つながりへと一歩踏み出せるよう、関係機関や情報サイトについても紹介します。

● ボランティア・市民活動センター（ビューロー）

市社協・各区社協では「ボランティア・市民活動センター」（一部区ではボランティアビューロー）を設置し、「ボランティア活動をしたい」「ボランティアをお願いしたい」など、ボランティア・市民活動に関する相談を受け付けています。

名 称	所在地（大阪市）	電話（06）	FAX（06）
北区ボランティア・市民活動センター	北区神山町 15-11	6313-5566	6313-2921
都島区ボランティア・市民活動センター	都島区都島本通 3-12-31	6929-9500	6929-9504
福島区ボランティア・市民活動センター	福島区海老江 6-2-22	6454-4553	6454-6331
此花区ボランティア・市民活動センター	此花区伝法 3-2-27	6462-1224	6462-1984
中央区ボランティア・市民活動センター	中央区上本町西 2-5-25	6763-8139	6763-8151
西区ボランティア・市民活動センター	西区新町 4-5-14	6539-8075	6539-8073
港区ボランティア・市民活動センター	港区弁天 2-15-1	6575-1212	6575-1025
大正区ボランティア・市民活動センター	大正区小林西 1-14-3	6555-7575	6555-0687
天王寺区ボランティア・市民活動センター	天王寺区六万体町 5-26	6774-3377	6774-3399
浪速区ボランティア・市民活動センター	浪速区難波中 3-8-8	6636-6027	6636-6028
西淀川区ボランティア・市民活動センター	西淀川区千舟 2-7-7	6478-2941	6478-2945
淀川区ボランティア・市民活動センター	淀川区三国本町 2-14-3	6394-2900	6394-2978
東淀川区ボランティア・市民活動センター	東淀川区菅原 4-4-37	6370-1630	6370-7330
東成区ボランティア・市民活動センター	東成区大今里南 3-11-2	6977-6336	6977-6339
生野区ボランティア・市民活動センター	生野区勝山北 3-13-20	6712-3101	6712-3001
旭区ボランティア・市民活動センター	旭区高殿 6-16-1	6957-2200	6957-7282
城東区ボランティア・市民活動センター	城東区中央 2-11-16	6936-1153	6936-1154
鶴見区ボランティアビューロー	鶴見区諸口 5- 浜 6-12	6913-7070	6913-7676
あべのボランティア活動センター	阿倍野区帝塚山 1-3-8	6628-3434	6628-9393
住之江区ボランティアビューロー	住之江区御崎 4-6-10	6686-2234	6686-0400
住吉区ボランティア・市民活動センター	住吉区浅香 1-8-47	6607-8181	6692-8813
東住吉区ボランティア・市民活動センター	東住吉区田辺 2-10-18	6628-2020	6622-8973
平野区ボランティア・市民活動センター	平野区平野東 2-1-30	6795-2200	6795-2929
西成区ボランティア・市民活動センター	西成区岸里 1-5-20	6656-0080	6656-0083
大阪市ボランティア・市民活動センター	天王寺区東高津町 12-10	6765-4041	6765-5618

大阪市ボランティア・市民活動センターホームページ
 [HP] <http://www.osakacity-vnet.or.jp/>
 [E-mail] ocvic@osakacity-vnet.or.jp



各区へのリンクは
こちらから



● 社会福祉法人 大阪ボランティア協会

大阪ボランティア協会は、ボランティア、NPO、企業市民活動を支える中間支援団体です。関西人のためのボランティア活動情報ネット「KVネット」、働き盛りの世代に向けて週末3時間でできるボランティア活動を提案する「ボランティアスタイル」など、ボランティア活動・市民活動の入口づくりを多彩な形で展開しています。



<http://www.kvnet.jp/> (KVネット)

社会福祉法人 大阪ボランティア協会

〒540-0012 大阪府中央区谷町2丁目2-20 2F 市民活動スクエア「CANVAS 谷町」

TEL 06-6809-4901 FAX 06-6809-4902 <http://www.osakavol.org/>

● 大阪市市民活動総合ポータルサイト

大阪府域の市民活動に役立つ情報を得ることができる総合ポータルサイトです。

ボランティア・イベント参加者募集、団体情報、資源の提供情報、助成金情報などの情報を発信しています。



<http://kyodo-portal.city.osaka.jp/>

編集後記・タイムライン



小出泰生

学生・若者のみなさんへ！
輝いている大人がココ（地域・NPO 活動、施設等）にいます。
地域のみなさんへ！
今どきの若者。すごくしっかりしてますよ。

鈴木大介



本当にそうですね！いろいろな方にお話をうかがって実感
いたしました。
わかものがソコ（地域・NPO活動、施設等）と交われば、
オモシロイ何かが生まれてくる！
このガイドブックが少しでもそのお役に立てれば嬉しいです。
そして…

岡田貴子



上書き OK。みんなでガイドブックを進化させましょう。
つながりのもひと。つながるのもひと。
どちらが欠けても成り立ちません。

一本松三雪



地域は若者を待っています。
“支え合う 住み良い社会 地域から”を合言葉に
地域の小中高校生をボランティアに巻き込んで
子育て支援に奮闘中です。

阿部賢太



地域には「学び」の要素があふれています。
視点を変えれば、地域は子どもの第2の学校。
一歩踏み出すと、地域には、大人と子どもが教え合い、
学び合う環境がありますよね？

福田留美



地域も、若者も、つながり人も、
出会い・ふれあい・支えあいましょ〜♪
お互いにキラリ ✨ と光る場面が見つかるとういんですね！
(=´▽`´)人(´▽`´=)

*似顔絵作成 ゆりんぐさん（小出さん、鈴木さん、阿部さん担当）
かしろう 佳咲さん（岡田さん、一本松さん、福田さん担当）

1 「10〜20代」に
焦点を当てて

2

それぞれの特色

3

活動の入口事例集

4

「わかもの×地域」その
コーディネートのコツ

5

資料集

検討体制

大阪市地域福祉活動推進委員会「新しい担い手の参画」班（平成 30 年 3 月時点）

名 前	所 属	備 考
福田 留美(班長)	NPO 法人 にしよどこネット 代表理事	推進委員会・委員
阿 部 賢 太	クラーク記念国際高等学校 大阪梅田キャンパス副 キャンパス長	推進委員会・委員
一本松 三 雪	天王寺区民生委員児童委員協議会 会長	推進委員会・委員
鈴 木 大 介	甲南女子大学 人間科学部 総合子ども学科 准教授	推進委員会・委員
小 出 泰 生	住之江区社会福祉協議会 まちづくりセンター主査	区社会福祉協議会
岡 田 貴 子	大阪市ボランティア・市民活動センター主査	市社会福祉協議会

(事務局) 大阪市社会福祉協議会 地域福祉課 田淵章大、畠山順子

大阪市地域福祉活動推進委員会（平成 30 年 3 月時点）

	名 前	所 属
委員長	松 端 克 文	桃山学院大学 社会学部 教授
委 員	阿 部 賢 太	クラーク記念国際高等学校 大阪梅田キャンパス副キャンパス長
委 員	乾 繁 夫	社会福祉法人 大阪市西成区社会福祉協議会 会長
委 員	一本松 三 雪	天王寺区民生委員児童委員協議会 会長
委 員	大 野 波	平野区平野地域 地域福祉活動コーディネーター
委 員	大 野 素 子	公益社団法人 大阪府精神障害者家族会連合会 監事
委 員	川 島 ゆり子	花園大学 社会福祉学部 社会福祉学科 教授
委 員	阪 中 雅 博	大阪市市民後見人連絡協議会 会長
委 員	鈴 木 大 介	甲南女子大学 人間科学部 総合子ども学科 准教授
委 員	高 谷 和 幸	サントリーホールディングス株式会社 大阪秘書室部長
委 員	新 田 正 尚	社会福祉法人 白寿会 総合施設長
委 員	平 田 篤 州	元 社会福祉法人 産経新聞厚生文化事業団 理事長
委 員	福 田 留 美	NPO 法人 にしよどこネット 代表理事
委 員	山 口 育 子	社会福祉法人 大阪市阿倍野区社会福祉協議会 事務局長
委 員	山 田 裕 子	NPO 法人 大阪 N P O センター 副代表理事
相談役	上野谷 加代子	同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授

「大阪市地域福祉活動計画」「参画と協働のための地域福祉ガイドブック」は、
大阪市社会福祉協議会のホームページからご覧ください。

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

大阪市社協

検 索

(トップページ ▶ いろいろ知りたい ▶ 調査研究・報告書コーナー内)



平成 30 年 3 月

参画と協働のための地域福祉ガイドブック②

わかもの×地域

10 ～ 20 代が地域に触れる・活動に参画するためのコーディネート

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

〒 543-0021 大阪市天王寺区東高津町 12-10

TEL : 06-6765-5606 FAX : 06-6765-5607

ホームページ <http://www.osaka-sishakyo.jp>

